ポスト・「マクドナルド化」時代の行方
——ファーストフード産業の持続可能性の模索——

小　坂　勝　昭*

Toward the Sustainability of Fastfood Industry
—The post-McDonaldization thesis—

Katsuaki Kosaka

I　問題提起

日本へ「マクドナルド」が進出したのは1971年のことである。この当時、まだ日本ではハンバーガーが何かは一般にはほとんど知られていなかった。一号店は銀座三越の一階で客席なしの小さな店舗であった。客席なしで、すべてテイクアウトだから立ち食い客が銀座を闊歩した。ところが瞬く間に日商120万円と世界最高記録を達成した。ファーストフードという新しい販売スタイルはあっという間に銀座から、日本社会に定着していった。別の表現を使えばアメリカ文化＝アメリカン・ライフスタイルが日本では容易に受容され、定着したと判断できる[1)]。それから35年が経過し、日本には4000近くのマクドナルドのレストランがあり、アメリカに次いで店舗数では二番目である。バーガーキング、ピザハット、ケンタッキー・フライドチキン、サブウェイなど、更に「マクドナルド化」の原理を活用する日本のレストラン・チェーンであるモス・バーガーもある。

「マクドナルド化を特徴づける諸原理は、より一層多くの社会の諸分野を特徴づけるようになっている。」[2)]というG.リッツアの指摘が本研究の出発点になった。合理性と効率性の追求という「マクドナルド化」の原理はファーストフード・レストラン「マクドナルド」の進出に止まらず、アメリカ文化、アメリカ的経営を浸透させてきた。こうした合理化が世界に拡大していくとともに、リッツアの提起するように効率性の追求に伴う「合理化に伴う不合理」の側面についても考察を進めなければならない。マクドナルド化が進行しつつある現在時点においても効率性、合理性重視のファーストフードに対してある種の疑念と危惧を抱き始めた人びとが存在するのも事実である。子供の太りすぎがファーストフードに原因があるとすれば、単に健康を害するというだけではない。国家レベルの深刻な健康問題と受け止め対応策を練るアメリカの学校が出始めており、いずれ日本へも波及するのは時間の問題である。

*　こさか　かつあき　文教大学国際学部

また、シュロッサーの邦訳『ファストフードが世界を食いつくす』の表紙の帯に刷られたアトランタ・ジャーナル紙評「ファストフード産業は、いまや、環境や健康を、自衛農民や労働者を、そして国家の権威と文化の多様性を侵害する巨大企業体である。」[3] という厳しい評価をいかに受けとめ解釈するかが問われるのである。

(a) G.リッツアの「マクドナルド研究」

本研究は、G.リッツアを有名にした『マクドナルド化する社会』(1996) で提案された「マクドナルド化 (McDonaldization)」の概念、及び『マクドナルド化のテーゼ』(1998) の中で提唱されている「マック・ディズニー化 (McDisneyization)」の概念に焦点をあて、ポスト・モダンの段階へ突入した「マクドナルド化」の今後の行方、及び「ファストフード産業」の持続可能性を探ろうとする試みである。

リッツアはメリーランド大学の社会学教授であり、初期の業績を見る限り理論社会学者として出発し、M. ヴェーバーの官僚制論をはじめ、K.マンハイムの合理性の概念に関する研究を続けてきた。アメリカ社会の中で次第に進んでいく合理化と効率化の過程をファーストフード・レストランのマクドナルドに見出し、「マクドナルド化」という概念を提案したものである。マクドナルド化の影響は日本をはじめ世界に波及し、教育、スポーツ、政治、宗教、ツーリズムなどの広範な制度までが「マクドナルド原理 (McDonald' principles)」を受容してきた。リッツアのマクドナルド研究の処女作が1983年の『アメリカ文化ジャーナル』誌に発表された「社会のマクドナルド化」論文であり、それを発展させたものが1996年に刊行された『社会のマクドナルド化』である。この著書は、合理化過程の研究を土台に「マクドナルド化現象」のもたらす圧倒的な影響に分析のメスを加えたもので、わが国でも大きな反響を惹き起こした。そして、1998年に刊行された第二の著作『マクドナルド化のテーゼ』によって、今度は「マック・ディズニー化」テーゼを提案している。この主要な二つの著作は既に社会学者の正岡寛司・監訳として公刊されており、リッツアの与えた影響の大きさを物語ると言える。さらに、2003年にはG.リッツア・丸山哲央・編著の『マクドナルド化と日本』(ミネルヴァ書房) が刊行された。この書物の下敷きになっているのは仏教大学総合研究所主催で実施されたシンポジウム「グローバル化時代の日本文化—マクドナルド化現象と日本」(2001年6月) の研究成果である。以上の文献を参考にしながら「マクドナルド化」が日本文化、企業経営にいったいどのような影響を与えているのか、を検討したい。

この論文は従って、リッツアの業績が何故このような高い関心と評価を得ることになったのかを解き明かす試みでもある。

(b) マクドナルド大学訪問と藤田田(ふじたでん)の記憶

筆者は1988年初春、留学先のイリノイ大学で指導を受けていたHide Hinomoto (日本博英) 教授のご案内でイリノイ州オークブルックの「マクドナルド大学」を視察した経験を持っている。McDonald Universityの看板がかかる玄関を入ると、構内は調理器具が完備した調理室が大学の教室のように整然と配置された施設であった。大学の講義室は机が整然と並ぶイメージである。しかし、その視察当時の筆者の記憶では、きれいに磨かれたステンレスの調理台が整然と配置された調理室が教室のごとく並んでいた。訪問したのが土曜日であったため学生が学ぶ姿を垣間見ることはできなかった。案内してくださった藤田田 (1926-2004) 氏[4] は、ここでマクドナルドの

中堅社員が定期的に技術指導を受けるための再教育のための施設であると説明された。

筆者はその当時、巨大なアメリカ文化の真っ只中で右往左往という状況で、Hinomoto教授のご配慮がなければこうしたチャンスにも恵まれることは無かったであろう。Hinomoto教授は藤田田氏と旧知の間柄であり、ランチェオンの際にしばしば成功した日本人として藤田田氏の話をされることがあった。　藤田田氏は、その頃、日本支社長でマック銀座店は既に売り上げではアメリカを抜きトップであった。マックの進出の方針は、子供の味覚が出来上がる幼少時にマックの味を覚えれば一生食べ続ける、そんなハンバーガーを提供する、という世界制覇の野望があった。こうした戦略に基づきアジア進出を計画した。この戦略は見事に世界を支配し、今日のマック成功につながったのである。

マクドナルド大学の視察から随分時間が経過した2004－2005年の二年間、筆者は中国の環境調査のため中国の私企業のリサーチを実施したが、中国もかつての日本同様、北京のような都会にはマックや吉野家、サイゼリアなどが出店し、若者の人気のデート場所になっていた。また、別の機会であったが、万里の長城の登山口にマックが出店していたので驚いたことがあった。更に驚いたのは、マックの中にケンタッキーが同居していたことである。多くのみやげ物屋が立ち並ぶ露天通りのはずれにマック＝ケンタッキー店が出店していたことに唖然としたのである。マックの世界戦略は、とっくに中国進出に乗り出していた。筆者にとってこうしたマックの世界戦略とはいったい何か、が大きな関心事になった。現在、中国のマクドナルドは店舗数700軒を数える。日本の3800軒に及ばないとしてもおそらく今後は中国各地にマックが増え続ける可能性は高い。

Ⅱ　マクドナルド化現象と合理化革命

(a) マクドナルド化「パラダイム」の浸透

G.リッツアは、「マクドナルド化」の定義を、「ファーストフード・レストランの諸原理がアメリカ社会のみならず世界の国々の、ますます多くの部門で優勢を占めるようになる過程」[5] と述べている。マクドナルドのフランチャイズ化を成し遂げたレイ・クロックもこの彼自身の創造物がもたらす衝撃を予測することはできなかった、と指摘する。

社会学者のリッツアがはじめてマクドナルドと出会ったのは1968年、マサチューセッツ州へ向かう道すがらであった。そして彼は、その金色のアーチが何か新しい意味のあるものを象徴しているのではないか、と潜在意識下で認めたことを告白している。社会学者であれば当然のことであろうが、リッツアもまたK．マンハイムやM．ヴェーバーの影響を受け、社会の合理化過程に関心を持ち続けた。従って、合理化のたどり着く最終形態が官僚制であると長いあいだ考えてきたにも拘わらず、リッツア自身は次第に次のように考えるようになった。

「新しい何ものか」が地平線にあらわれるのがみえ、「その何ものかは官僚制構造にとって代わる合理化のモデル」[6] であったと。「その『何ものか』は、ファーストフード・レストラン、もっとはっきりいってしまえばマクドナルドという形をとって露わになった。ファーストフード・レストランはレストラン業界に革命を起こしただけでなく、アメリカ社会に、そしてついには世界に革命を起こしはじめた。」[7]

リッツア自身、1992年5月、『マクドナルド化する社会』の初版本の印刷中にモスクワのロシア科学アカデミーで講演をおこなっていたが、マクドナルドが既にモスクワの中心街にあり、モ

スクワっ子がこれこそアメリカ文化という理由で惹きつけられていたと述べている[8]。この書物の初版本は大きな反響を呼び、7ヶ国語の翻訳版が準備された。そして日本版の序言において、日本がマクドナルド化システムをとても受け入れやすい国であると述べている。

その理由を、日本がマクドナルド化されたシステムと多くの共通点を持っていること、例えばうどん屋やそば屋は、ファーストフードを販売しており、マクドナルドやアメリカのファーストフード・チェーンの先駆けであるとさえ指摘する[9]。

また、大貫・ティアニー・恵美子の論文「日本のマクドナルド－変わる行儀作法」を引用しながら「シカゴに修学旅行に出かけた日本の生徒たちがそこにもマクドナルドを見つけてびっくりした」という話は、「マクドナルドが奇妙にローカルなものになった」ことの反映であるとも指摘している[10]。こうした指摘から推測しうるのはマクドナルドが世界のいたるところに浸透しつつあるという現実であろう。

(b) 社会の「マクドナルド化」と合理化過程

リッツアは、先に指摘したように、ヴェーバーの官僚制と合理化過程に関心を持っていた。即ち、マクドナルド化は、ヴェーバーの合理化理論の拡張であり、「ファーストフード・レストランがマクドナルド化のパラダイムなのである」[11]。ヴェーバーは近代西欧社会に特有の合理性について論証したが、リッツアの指摘によれば、ヴェーバーが形式合理性と呼んだ類型は何処にも存在したことがないという。形式合理性とは与えられた目的に対して最適な手段を探ることが規則や社会構造によって共有され、制度化されていることを意味する。従って人びとは最適な手段を自から探す必要はなくなるのである。実際に、すべての人が最適な同じ選択をなしうるということを意味する。ヴェーバーが官僚制、つまり「形式合理性パラダイム」を賞賛したのは、他の手段に比較して目的達成の最適手段を発見したり実行したりする上で多くの利点を有するからに他ならなかった。確かに、マクドナルドのレストランでメニューの選択に困ることは無い。決められた価格の商品を注文し、雰囲気を楽しむ。こうしたマックでの食事はマクドナルドで事前に徹底的に準備された共通のプログラムに支配されているからである。

リッツアは彼の第二の著書『マクドナルド化のテーゼ』(正岡・監訳では、『マクドナルド化の世界』と翻訳されている) 序論で「マクドナルド化という用語の使用は、ウェーバーの官僚制(および官僚制化の過程) よりも、むしろファーストフード・レストランの方が、現代世界における合理化過程を表出するのにすぐれたパラダイムであるというわたしの確信の反映なのである。」[12] と述べる。

そして、リッツアは官僚制の四つの要件を以下のように 整理している[13]。

①ヴェーバーは官僚制が文書によって多くの作業を処理するため最も効率的な構造をもつとみなした。

②官僚制は、計算可能性、即ち多くの物事をできるだけ定量化することに力点を置くが、数量的アプローチには問題もある。それは作業の質に関心を払わず、未徴収歳入のために政府予算を浪費しているかも知れず、そのため納税者の怒りを惹き起こすかも知れない、などの問題点がある。

③強固に確立された規則と規定のために、官僚制は高度に予測可能な仕方で作動する。従って、他の部局員の行動について確かな知識をもっている。

④官僚制は「人間の技能を人間によらない技術体系に置き換える」ことによって、人びとを制

御する。

官僚制とは、人間による判断を規則や規定、構造の命令に置き換える画期的な試みである。従業員は分業によって管理され、分業はそれぞれの部局にきちんと定義された職務を限られた数だけ配分する。そこでは人びとは作業の遂行にあたって特異な方法を編みだすとか、独自の判断をせず、人間は人間ロボットかコンピューターに近くなる。

リッツアは官僚制についての整理から、マクドナルドをはじめとするファーストフード・レストランが官僚制と同様の「形式合理性」の基本的な四つの要素—「効率性、予測可能性、計算可能性、人間の技能を人間によらない技術体系に置き換える、ことによる制御」—によって運営されると指摘するのである。

(C) ファーストフード普及と効率性・合理性の浸透

現代人にとってのファーストフード・レストランの役割とは何であろうか。多忙な現代人が、もし材料を仕入れて調理する時間が無ければドライブスルーでビッグマックを購入して自分の仕事場へもち帰り深夜まで仕事を続ける、という場面を想像することは容易なことである。

リッツアの指摘するように、ここで効率性とは明らかに消費者にとっての都合の良さを意味する。例えば、欲しいものが簡単に入手できるとか、労働者が自分の仕事を迅速、かつ簡単に遂行できるとか、またそうできれば経営者も利益を得ることができる。従って、ファーストフード・レストランは、「効率性への欲求それ自体を生み出すのではなく、効率性への欲求を普遍的な欲望へと変えていく。」[14] ものであるという彼の指摘は的をえたものである。

リッツアは、また家庭料理も食事の方法としてはまだ非効率だという。レストランのほうが労力という面から考えれば効率的の筈であるが、レストランへ行き食事をして帰宅するまでに数時間もかかるとすれば効率的といえるだろうかと。こうして、効率的なレストランを求める要求から出てきたのが食堂、カフェテリア、初期のドライブスルーなどであり、これがファーストフード・レストランの「直接の祖先」である。

マクドナルドの「フランチャイズ制」の生みの親であるレイ・クロックはマクドナルド兄弟に始めて会い、二人の行う作業の効率性に魅せられた。「メニューを限定した上で作られる料理は細かな段階に分けられ、最小の労力で行われていた。彼らは、ハンバーガーとチーズバーガーしか売らない。バーガーは・・・すべて同じやり方で焼かれていた」[15] からだ。

リッツアによれば、マクドナルドは「分泌から排泄までのスピードを速めるためにあらゆることを」実行したとまで言う。徹底した簡素化の流れは、合理化の流れであり、たやすく駐車し、カウンターまで少し歩くだけでよい。また、メニューが制限されているので、客は悩むことなく選択すればよい。片付けも包み紙、発砲スチロール、プラスチックなどを近くのゴミ箱に捨てればよい。そして、車にもどって「マクドナルド化された」活動へと車で向かう。

従業員のなすべき筈であった「運ぶ」、「捨てる」という一連の動作は今や客がドリンクコーナーから自分の好みの飲み物を運び、サラダバーコーナーで自分のハンバーガーの横に好きな野菜を盛り付ける、こうした作業はすべて客が行う。

また、この業界の主力商品は、料理するのも食べるのも簡単で、多くの材料を必要としない[16]。例えば、サラダセットは何処の店でもほとんどレタス、トマト、きゅうりの「三点セット」である。事実、ファーストフード・レストランは、一般にフインガーフードと呼ばれる「手指を使って食べる」食べ物を提供している。ハンバーガー、フレンチフライ、フライドチキン、ピザ、タ

コスなどのファストフード産業の主力商品は、すべてフインガーフードである[17]。従って、今日、合理化はすべてのファーストフード・レストランに浸透している。

Ⅲ　マクドナルド化の世界的展開

(a) マクドナルド化と効率化の事例

これまでのリッツアの分析に従えば、社会全体がマクドナルド化の方向へ進んでいる。大学も、医療現場も、企業の生産現場においても。大学では、マークシート方式が論述形式の試問にとって代わり、大学教員の業績審査はどの学会誌に論文を何点発表しているかで判定される。権威ある学会誌に発表した論文は高得点があたえられ、業績はすべて総得点で評価される。リッツアは大学を「マック大学」と呼び、学生を箱に詰めるだけ、と酷評している。また、ヘルスケアにおいても合理化は進み、「モスクワ眼科顕微手術研究所」における光景を近代的な工場にたとえて、コンベアが静かに五つのワークステーションを通っていく。無菌の作業衣とマスクを身につけた従業員が持ち場についており、コンベアが通り過ぎる３分間で自分の仕事を完了する。しかし、作業ラインはとても非日常的な光景である。従業員は眼科医、ベルトコンベアは人間を運んでいる。これは、ヘンリー・フォードの生産方式を医療現場に応用した「健康な視力を生産する医療工場」であると指摘する。そう遠くない未来に、これがごく普通の医療現場になることは想像に難くない、と断言している。

合衆国の医療現場における効率性の増大と、マクドナルド化の影響を示す最良の例は、予約なしで診てもらえる応急診療所の増加であり、そこで診療にあたる「マック医師」や、「簡易診療所の医師」が効率的に素早い治療にあたる。裂傷のある患者は、ハンバーガーを求める客ほどには効率的に縫合されるわけではないが大病院の救急外来を目指して迷路をさまようよりも、「マック医師」に治療してもらうほうが効率的である。

これらのリッツアによる一連の分析を見れば効率性の原理が社会の諸々の場面に次第に浸透していることが理解できる[18]。マクドナルドとならび、ディズニーワールドで遊ぶ観光客に対するサービスも徹底した効率性と合理性に裏付けられたものである。

(b) マクドナルド化とディズニー化

—マック・ディズニー化戦略のツーリスト産業に与える影響—

アメリカから発信され、世界に拡大するマクドナルド化は世界に効率性・合理性を発信し続けてきたが、ディズニーワールドも多くの点で効率的である。特に、代表的な「テーマパーク」は、非常に効率的かつ合理的で多くの入場者をてきぱき整理する方法や、週間入場チケットは「計算可能性」を証明し、かつ「予測可能性」も高い。従業員はチームを組み、日常の清掃業務をこなし、夜のパレード後のゴミも動物の糞も拾い集めてくる。そうして保つ清潔感は好意的に受け止められてきた。しかし、長い行列と長い待ち時間は非効率この上ないものであり、まさに「合理性の非合理」を露呈してしまう。人間的な休暇となるはずのものが「非人間的な経験」に変わってしまうケースである[19]。

リッツアは、マーガレット・キング・Jr.の論文「マクドナルドとディズニー」の叙述に依拠して、「ディズニーのテーマパークは、マクドナルドと同じ時代に出現し、ディズニーランドとマクドナルド・チェーンの最初の店舗は、ともに同じ年—1955年—にできた。それらは多くの

『同じ原理に基づき』、しかもそれをはっきりと表明していた。」と述べている[20]。

さらに彼は続けて、「もしマクドナルドが全体社会における合理性のパラダイムだとするならば、ディズニーは確実にツーリスト産業の典型である」というブライマンの叙述をもあわせて引用している[21]。この二つの引用はマクドナルドとディズニーの緊密な結びつきを予想させるものである。ディズニーの驚異的な成功こそが、マクドナルド化の原理がツーリスト産業に持ち込まれた最も大きな原因であると指摘し、「われわれは－読者がマクドナルド化よりもさらに醜悪な（uglier）別の新造語（neologism）の使用を許してくれるなら－ツーリスト業界の『マック・ディズニー化』について論じることができる」[22]とこの新しい造語を提案するのである。

リッツアは、すべてのテーマパーク、クルーズ船、カジノ、ショッピングモールがアミューズメントパーク化していると述べ、また「ツーリスト産業」も一般的に「マック・ディズニー化」の方向に向かい、カジノで成り立つラスベガスも町全体がテーマパーク化していることは間違いないと言うのだ。

観光社会学の領域では、パック旅行の衰退が指摘され、特にアーリーは、『観光のまなざし』のなかで標準化された旅行が全盛期を過ぎ、衰退しつつある、と指摘している[23]。

それに対して、リッツアは、「規格化されたツアーの減少を根拠としたアーリーの議論は、少なくとも、社会のこの分野においては、マクドナルド化のテーマにたいする直接的な反証となっている」ことを指摘し、ツーリズムもフォーディズムの段階からポスト・フォーディズムの時代へと移行していると主張している[24]。海外旅行が一般庶民の手に届くものとなった時代、ほとんどが団体旅行であり、いかに効率よく多くのツアー客を目的地に運ぶか、到着した後も周遊ルートはプログラム化され、ショッピングまでが組み込まれたパックツアーをツアー客は受け入れ、それなりに楽しむことができた。

こうした規格化されたツアーは、実は「効率性」、「予測性」、「計算可能性」、「高度に制御された休暇」、というマクドナルド化の特徴をもつものであった。こうした典型的な「マクドナルド化」されたツアーは、まさにフォーディズム時代の遺産であるとも指摘できよう。しかし、リッツアは「現在の旅行が、少なくとも部分的にはマクドナルド化の成功のために、以前のものよりもマクドナルド化されなくなっている」と指摘する[25]。

具体的に述べれば、社会のマクドナルド化のために、パック旅行そのものをマクドナルド化する必要性が薄れたのだという。旅行を主催する側が食事を提供する場合も、ツアー客がその食事に満足できるか否かというケースについて考えてみると、ツアー客の中には現地の本来の食事がどうしても喉を通らないというケースが出てくる。慣れないツアー客の場合、「やっぱり日本食が一番ね」という不満の声が出てくる場合だ。主催者は日本人向けの食事を用意せざるをえない。

こうしたケースに対して、リッツアの答えは、「しかしいまでは、ほとんどの場所で、ツーリストは自分たちだけが置いていかれても大丈夫である。なぜなら、標準化された食事が欲しい人びとは、その場所のマクドナルドや、他の国際的なファーストフードレストランチェーン店で、標準化された食事を難なく手に入れることができるからである。」[26]と述べるが、リッツア自身が「ポスト・フォーディズム」、あるいは「ポスト・モダン」のマクドナルド化の行方に大いに関心があり、そうした認識が支配的であるからだ。

即ち、フォーディズム時代の「生産優位の時代」からポストモダンは「消費優位の時代」への変化を現している。彼自身の関心も移行してきた。たとえば、世の中の消費スタイルが現金から、「カード」時代へと完全に移り変わって、新たな問題が浮上し始めたからである。

パック旅行が「マクドナルド化」の原理を満たす、効率性，予測性、計算可能性、制御された旅行、という条件を満たした時代から、ポスト・モダンの段階に突入したと考えることは不自然ではない。こうした考え方は、「マクドナルド化の否定」の上に成り立つのではない。アメリカ的効率性を世界に拡大し続けるマクドナルドの新たな戦略の構築が待たれるのである。

(c)「ポスト・マクドナルド化」の行方

しかし、地球温暖化をはじめとする環境問題が緊急の課題となりつつあるなかで、食の大切さを若い世代の青年、子供達にどう教えていくか、という切実な課題にどう答えるかが筆者の問題提起である。ファーストフードが、アメリカの大量生産、大量消費という工業文明から生み出された落し子であるとすれば、マックのハンバーガーは碓井の指摘のように「工業製品」に近い性格をもっている[27]。

既に、農業や漁業の工業化が始まっていることを考慮すれば、驚くには値しない。碓井の定義によれば、スローフードとは「遅いという点に識別基準があるのではなく、産地・消費地がある限定した範囲で一体化した地域循環システムの食生活のことである。」[28] と述べ、更に次の条件を付け加えている。「調理場の熱気、板前の心意気が伝わってくる料理」[29] と定義づける。しかし、夫婦共働きの家庭に調理場の熱気を取り込むことは、不可能に近く、効率性の要求に従って、「マックへ行って食べてきて。」と頼む親がいることも否定できない。北イタリアのブラで1986年に、スローフード協会が誕生し、今日45カ国に7万人の会員を擁するNPOになっている。また、日本スローフード協会は、1999年に発足し、コンヴィヴィアという「ともに生きる」「共に食べる」という意味の組織をつくっている。

スローフードの誕生はファーストフードの合理性が食の安全性に疑問を持つ有志によってなされたものであり、ファーストフードの合理性の内実こそ問われるべき課題であろう。輸入ジャガイモはフライドポテトに加工されるが残留農薬が除草剤の残留基準0.05という他の農産物に比して50という数値であったことが渡辺によって指摘されている[30]。フライドポテトに牛脂が使用され、脂肪の帝国が肥満の子供を生み出す危険があることが指摘され始めた。従って、ファーストフードで提供される標準化された食事がひとの健康に優しい、そして安全レベルを満たした食の提案がマクドナルドの方針として「プログラム化」されることが今後のマクドナルドの発展につながる筈である。ツーリズム産業の領域においても、管理された安全性基準を否定するものではないが、個人の望む周遊旅行の設定、及び地球の環境と人間の健康に配慮する「ロハス観光」が支配的になるだろう。「食」の面からみても今後の方向性として、単なる標準化された食事メニューから産地の新鮮な食を提供する方向が模索されるべきである。そうしたプログラムの設定は個々の地域に根ざした「スローフード・マック」であるかもしれない。

結びにかえて

戦後の日本の経済復興はアメリカから学んだ経済・文化制度の形式合理性を吸収した成果ではあるが、R. N. ベラーの指摘するように日本の伝統的な倫理基準も貢献してきた。勤倹・節約、誠実な商い、忠義と武士道など、実質合理性に富む文化や信仰がおおきな力となった[31]。日本という国家を維持・発展させようとする大義名文が企業への忠誠につながり、小集団活動の成果から多くの成功事例が発展した。リッツアは日本では、実質合理性（和の精神、集団主義）、理論

合理性（教育重視）、実践合理性（稟議制、根回し）、が形式合理性（官僚制組織、資本主義経済制度、）とうまく連動し「シナジー効果」が発揮されたと考えた。これをリッツアは「超合理性」(hyperrationality）と呼び、これこそが日本のトヨタ方式を産んだ要因と見ている。日本独自の文化が何時まで永続するのかを見極めることが増々重要な課題となっている。

（注）

1）若林靖永「マクドナルド化と日本企業—日本マクドナルド、セブン－イレブン・ジャパン、トヨタ自動車— 」『マクドナルド化と日本』（G.リッツア・丸山哲央・編著）ミネルヴァ書房、262頁。G.リッツア「マクドナルド化の日本にとっての意味」、同書、98頁。

2）G.リッツア「マクドナルド化の日本にとっての意味」、同書、98頁。

3）マクドナルド化を告発し、批判した文献としてEric Schlosser, Fast Food Nation, Houghton Mifflin Company,N.Y.2001.邦訳は、 シュローサー･楡井浩一訳『ファストフードが世界を食いつくす』（草思社、2001）

4）藤田田（1926-2004）は24歳で藤田商店を設立、朝鮮特需で非凡な才能を発揮し、ユダヤ商法の著作もあり、「銀座のユダヤ商人」と呼ばれた。クリスチャン・ディオールの代理店契約を獲得し、年商５０億の商店に育てた。その後、藤田商店のアメリカ支店長を介してマクドナルドのレイ・クロック会長と知り合い、日本マクドナルドを立ち上げた。日本マクドナルド会長を経て７４歳で逝去。田という珍しい名前はクリスチャンであった母親が、話すこと、口にすることを神に守ってもらえるようにと、「口の中に十字架が入っている」田という名前がつけられたもの。『外食産業を創った人びと』産業界、2005、池田宗明章担当の第1章、10－18頁。

5）正岡寛司監訳（1999）『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、17頁。

6）同書（初版序言）、1頁。

7）同書、1頁。

8）同書、3頁。

9）同書、日本語版への序文、13頁。

10）同書、14頁。E.Onuki-Tierney."McDonaldo's in Japan:Changing Manners and Etiquette,"in J.L.Watson（ed.）Golden Arches East:McDnald's in East Asia. Stanford Univ.Press.1997.大貫・ティアニー・多恵子論文は『マクドナルドはグローバルか』（ジェームズ・ワトソン編・前川啓治・竹内恵行・岡部曜子・訳）第５章、2003。

11）前掲正岡監訳（1999）、47頁。

12）リッツア・正岡監訳（2001）『マクドナルド化の世界—そのテーマはなにか？』早稲田大学出版部、6頁。

13）前掲訳書・リッツア（1999）『マクドナルド化する社会』、48－49頁。

14）同書、72頁。

15）同書、74頁。

16）同書、77頁。

17）同書、78頁。

18）同書、81－84頁の叙述をみよ。

19）G.リッツア・正岡寛司監訳（2001）『マクドナルド化の世界—そのテーマはなにか？』、236－237頁。

20）引用されたキング論文は、“McDonald's and Disney," in Marshall Fishwick（ed.）, Ronald Revisited: The World of Ronald McDonald.: Bowling Green University Press, 1983. 正岡監訳（2001）『マクドナルド化の世界』237頁。

21）同書、237頁。ブライマンからの引用は、以下の著作からである。Allan Bryman, Disney and His

Worlds.London:Routledge,1995.

22）同書、238頁。

23）Ritzer,G, The McDonaldization Thesis, 1998, p.136. J.アーリー『観光のまなざし』86－92頁。

24）同書、239頁。Ibid., p.137.

25)、26）同書、239頁。Ibid., pp.137-139.

27)、28)、29）碓井たかし「マクドナルド化のプログラム分析」『マクドナルド化と日本』（2001）所収論文、215頁。

30）碓井、219頁。渡辺雄二（1999）『図解でわかる危ない食材』日本実業出版、71頁。

31）R.N.Bellah（1985), Tokugawa Religion—The Cultural Roots of Modern Japan. R.N.ベラー・池田昭訳『徳川時代の宗教』岩波文庫、1996.

（リッツアの著作リスト）

(1) Ritzer, Geoge（1975/1980）Sociology: A Multiple Paradigm Science. Boston:Allyn and Bacon.

(2) Ritzer, George（1981）Toward an Integrated Sociological Paradigm: The Search for an Exemplar and an Image of the Subject Matter. Boston: Allyn and Bacon.

(3) Ritzer,George（1983）"The McDnaldization of Society", J. of American Culture, 6: pp.100-7.

(4) Ritzer,George（1988）"Problems,Scandals and the possibility of 'Textbook Gate': An Auther's View", "Teaching Sociology, 16: pp.373-80

(5) Ritzer, George（1990）"The Current Status of Sociological Theory:The New Syntheses", in Geoge Ritzer (ed.),Frontiers of Social Theory: The New Thintheses. New York: Columbia University Press. pp.1-30.

(6) Ritzer, George（1991）Metatheorizing in Sociolog. Lexington Books.

(7) Ritzer, Geoge（ed.）（1992）Metatheorizing. Newbury Park, Ca:Sage.

(8) Ritzer, George（1993）The McDonaldization of Society: an investigation into the changing character of contemporary social life, Thausand Oaks,CA: Pine Forge Press.

(9) Ritzer, George（1995）Expressing America:A Critique of the Global Credit Card Society. Thausand Oaks,CA:Pine Forge Press.

(10) Ritzer,George（1996a）The McDonaldization of Society, revised edn.Thausand Oaks, CA: Pine Forge Press.（正岡寛司監訳『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、1999）

(11) Ritzer, George（1996b）Sociological Theory, 4 th edn. New York: McGraw-Hill.

(12) Ritzer, George（1997）Post modern Social Theory. NewYork: McGraw-Hill.

(13) Ritzer, George & Lisca, A.（1997）McDisneyization and Post-tourism: Complementary Perspectives on Contemporary Tourism, in Chris Rojek and John Urry（eds.), Touring Culture:London Routledge, 1997., pp.96-109.

(14) Ritzer, George（1999）Enchanting a disenchanted World: Revolutionalizing the Means of Consumption, Newbury Park, Calif.: Pine Forge.

(15) Ritzer, George（1998）The McDonaldization Thesis, SAGE pub.（正岡寛司監訳『マクドナルド化の世界—そのテーマは何か－』早稲田大学出版部、2001）

(16) Ritzer, George（2001a）Explorations in Social Theory: From Metatheorizing to Rationalization, Lomdon: SAGE.

(17) Ritzer, Geoge（2001b）Hyperrationality: An extention of Weberian and neo-Weberian theory, in G. Ritzer (ed.), Explorations in Social Theory, pp.218-235.

(18) Ritzer,George（2001c）McDonaldization and its implications for Japan.（仏教大学総合研究所主催、国際シンポジウム「マクドナルド化現象と日本」『マクドナルド化と日本』（G.リッツア・丸山哲央・編著）ミネルヴァ書房、2003．所収。

(19) Ritzer, George, & Zhao, S., Murphy,J (2001) Metatheorizing in sociology: The basic parameters and the potential contributions of postmodernism, in Jonathan H.Turner (ed.), Handbook of Sociological Theory, pp.113-131., New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
(20) Ritzer, George (2002) McDonaldization: The Reader, Pine Forge Press.